

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K18643

研究課題名(和文)アイヌの知識、自然観を取り入れたESDの教材開発

研究課題名(英文)Developing ESD Teaching Material with Ainu Understanding and View of Nature

研究代表者

島津 礼子(REIKO, SHIMAZU)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・研究員

研究者番号：00760034

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、民族のアイデンティティが尊重される持続可能な社会を構築するために、わが国の先住民アイヌの知識、自然観を取り入れた教材を開発することである。まず、北海道におけるアイヌの学習や取り組みを調査した。その上で、小学校高学年を対象に、アイヌについて学び、創造的思考力を育成することを目的とした単元を開発し、成果と課題を明らかにした。

アイヌの学習を広げるためには、教材や資料の拡充、学校や学年全体のカリキュラム開発、アイヌの歴史を現在へとつながる過程でとらえる授業の試みが必要である。さらに、持続可能な社会を構築するためには、アイヌの人々と共に学習を考えるという姿勢が必要であると結論付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)先住民アイヌの知識、自然観を取り入れた学びは、子どもたちの既存の価値観を揺さぶり、問い直す学習であり、ESDの基盤である論理的思考力、批判的思考力を培うものである。

(2)現在につながるアイヌの歴史や、今を生きるアイヌの人々の姿を知ることが、民族のアイデンティティが尊重される持続可能な社会の構築につながる学習である。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to develop teaching materials which incorporate the knowledge and views of nature of Japanese indigenous Ainu people in making a sustainable society. We researched Ainu studies and activities in public schools in Hokkaido. We developed a teaching unit which includes Ainu knowledge and views of nature to cultivate upper grade students' creative thinking in elementary school. Finally, we clarified learning effects and perspectives of this unit.

Regarding Ainu studies, we concluded that 1) expansion of teaching materials, developing curriculum school-wide or grade-wide, and 2) teaching Ainu history from the past leading to the present is needed. It is important to think and develop Ainu studies together with Ainu people to make a sustainable society.

研究分野：教育学

キーワード：アイヌ 先住民 ESD SDGs 共生 他者 口承文芸 社会科副読本

1. 研究開始当初の背景

「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development : ESD) 」は、世代内および世代間における公平な社会を構築することを目的として、人々の行動の変革を促す教育的取り組みである。一方、先住民の知識や自然観とは、先住民が長い時間をかけて、自然環境と相互に作用しあう中で培い、伝えられてきた複雑な知識体系である。その基底には、先住民の文化を生み育ててきた大地への深い理解と、尊敬の念が横たわっている。

アイヌは2008年の国会決議により、わが国の先住民族であると認められた。アイヌの人々が、民族のアイデンティティを尊重される持続可能な社会を構築するために、学校教育の役割が大きいことは言うまでもない。しかし、北海道以外の地域では、アイヌに関する教育は広がっておらず、学習の中で差別や人権といった深い問題にどこまで踏み込めばよいか、といった問題に直面している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、民族のアイデンティティが尊重される持続可能な社会を構築するために、わが国の先住民アイヌの知識、自然観を取り入れた教材を開発することである。アイヌの知識、自然観を取り入れた教材を開発することにより、子どもたちはアイヌの歴史や文化に対する理解を広げ、民族による価値観の多様性のみならず、共同体を維持するための方法や、資源の持続的な利用方法などを学ぶことができる。先住民アイヌの知識、自然観を取り入れた学びは、ESDの基盤となる論理的思考力、批判的思考力の養成につながると同時に、先住民の社会的認知の向上につながる学習であると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、当初3か年の計画を立て、(1) ESD や SDGs の理論的枠組みや、学習指導要領におけるアイヌに関する学習内容の整理、(2) アイヌの自然観や知識の収集と、北海道におけるアイヌ学習の調査、(3) アイヌの知識、自然観を用いた教材の開発と課題の特定という3項目について研究を行った。その後、感染症の影響により研究期間を2年延長したため、最終的に研究期間は5か年となった。

(1) ESD や SDGs の理論的枠組みや、学習指導要領におけるアイヌに関する学習内容の整理
ESD や SDGs 概念の理論的系譜や枠組み、ならびに現行の学習指導要領における先住民やアイヌに関する学習の取り扱いや内容を整理し、これまでの取り組みの傾向と課題を分析した。また、持続可能性に寄与する先住民の知識や自然観とはどのようなことを指すのか、観点を整理した。

(2) アイヌの自然観や知識の収集と、北海道におけるアイヌ学習の調査
アイヌの培った知識や自然観を、文献やアイヌの口承文芸などから整理し、社会の持続可能性に通じる概念を特定した。また、北海道の学校を対象として、アイヌの知識、自然観を用いた事例を調査するとともに、アイヌ関係者、学校関係者、博物館学芸員などにインタビュー調査を行った。

(3) アイヌの知識、自然観を用いた教材の開発と課題の特定
上記(1)(2)の調査結果を踏まえ、アイヌの知識、自然観を用いた単元を開発した。小学校において実施し、子どもたちの感想を集約するとともに、アイヌ関係者、学校関係者らのフィードバックを受けた。それらの意見をまとめ、先住民アイヌの知識、自然観を用いた教材の可能性と課題を考察した。

4. 研究成果

本研究の成果として、以下の点が明らかになった。

(1) アイヌの自然観と持続可能性、共生に向けた取り組み
アイヌの知識、自然観が、持続可能性に貢献できると考えられる理由を、以下の三点にまとめた。第一に、アイヌの生活様式には、動植物の少量ずつの使用と保存、力による争いを避け話し合いによる解決を目指すなど、高い持久力が備わっていることがわかった。第二に、アイヌは人間の優越性を強調せず、人間自体も自然界の一部にすぎないという価値観を持つ。さらに、火、水などにも魂を感じ、畏敬の対象として大切に扱っている。第三に、アイヌが語り伝えてきたユカラを始めとする口承文芸には、アイヌの過去と未来、世代間、集団間のつながりを保ち、聴く者にコミュニティへの所属感を認識させる役割を果たしていると考えられる。同時に、子どもたち

の思考力、想像力を促すコミュニケーションのツールともなり得ていることも示唆された。

大正、昭和初期において、学齢期のアイヌの子どもたちは実質的に政府の同化政策の中あり、厳しい教育環境に置かれていた。その時代にアイヌと和人の子どもたちがともにすごした、パチラー八重子らによる平取幼稚園と日曜学校の取り組みに着目し、調査を行った。平取幼稚園や日曜学校では、アイヌ語の使用禁止やアイヌ文化の否定はなかった。このような環境を作ったパチラー八重子らは、アイヌの子どもたちも和人の子どもたちも、幼い時から分けへだてなく遊びすごすことが大切だと考えていた。

(2) 幼稚園・小学校におけるアイヌ絵本の読み聞かせの効果検証

幼稚園・小学校において、アイヌの口承文芸を元に作られた絵本の読み聞かせを行った。子どもたちがアイヌの絵本にふれる効果について、次のような点が見出された。第一に、アイヌの絵本では、人と動物はすべて同等の立場にある尊いものとして描かれている。そのため子どもたちにとってアイヌの絵本は、日常生活の中で知り得てきた科学的知識とは異なる価値観にふれる機会となっていた。第二に、子どもたちは物語の中で、人や動物は生きていくために、他の動植物の命を頂いているという本質的な事象に向き合った。第三に、絵本の読み聞かせにより子どもたちは、カムイ、アイヌ、コタンといった、アイヌ語の言葉やリズムにふれる機会となった。これらの経験は子どもたちにとって、同じ国に暮らす異なる歴史と文化を持つアイヌを知り、自分たちの価値観との違いや共通性を認識する契機になったと考察した。

(3) 北海道におけるアイヌ学習の調査

北海道の公立小学校におけるアイヌ学習の現状と課題について、次の点を明らかにした。第一に、アイヌに関する学習については、北海道内における豊富な文化財や地域人材を用いた学習や、取り組みが行われている。その一方で、教育方法や他の概念との関連付けが模索されていることが示唆された。第二に、自治体が発行した社会科副読本を「他者性」という観点に着目して読み解くと、「主体」としての和人と、「他者」としてのアイヌという関係性が明らかになった。「他者」としてのアイヌの世界観への近接は、子どもたちにとって自己の存在や価値観を揺さぶられ、問い直す機会ともなり得ると考察した。その一方で、「他者」と「自己」との力学においては、優越と遜色、多数者と少数者といった関係性に陥る可能性も否定できず、分断を生じさせない学習が必要であると結論付けた。

(4) アイヌを学ぶ単元の開発

アイヌの歴史と文化を教材に、創造的思考力を育成することを目的として、小学校高学年を対象とした単元を開発した。この授業における創造的思考力とは、「現状の社会背景や社会構造という枠組みの中で、自分自身で最高解、もしくはより良い解について創造する力」と設定した。単元は全11時間により構成され、三部に分かれる。第一部(4時間)では、子どもたちは文化とは何かを考え、アイヌ文化について学習した。第二部(4時間)では、アイヌ文化を伝承している講師2名を北海道から招き、アイヌ語やアイヌの歴史、文様、楽器、踊り、アイヌの人々の現在の生活などを紹介してもらった。第三部(3時間)の授業では、子どもたちが自分たちとアイヌの人々の現在の生活を、関連付けて学習した。最終的に子どもたちは、異なる文化そのものを受け入れるよりも、自分たちの文化を融合させていくことが、異なる文化を受け入れやすくなるという結論を出した。

(5) アイヌの歴史・文化の教材化と課題

最終的に、アイヌの歴史・文化の教材化とその課題について、結論を次のようにまとめた。現状の教育課程では、アイヌについて学ぶための十分な時間が確保しづらいという構造的な課題がある。また、北海道以外の地域ではアイヌについての情報が少ない中で、教員が差別や人権といった問題にどこまで踏み込めばよいか、といった問題に直面する可能性も高い。その結果として、子どもたちのアイヌに対する理解が、表面的で狭い解釈に留まる恐れがある。さらには、子どもたちが、「支援の対象としてのアイヌ」という認識を脱するための学習も必要である。

これらの課題を克服するためには、アイヌに関する教材・資料、授業事例の拡充や、学校や学年全体のカリキュラムとして取り組むことの検討、アイヌの歴史を現在へとつなげる過程でとらえる授業の試み、そしてアイヌを学ぶ教材や授業を、アイヌの人々と共に考えるという姿勢が必要であると結論付けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 1島津礼子・丸山恭司	4. 巻 1
2. 論文標題 北海道の公立小学校におけるアイヌに関する学習の現状と課題 : 「他者性」の観点からの社会科副読本分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要『教育学研究』	6. 最初と最後の頁 285-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50210	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 服部太	4. 巻 1231
2. 論文標題 創造的思考力を育成する社会科授業 - 第5学年「わたしたちの生活と文化 - アイヌの文化について -」を事例にして -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学附属小学校学校教育研究『学校教育』	6. 最初と最後の頁 54-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 服部太	4. 巻 47
2. 論文標題 社会科で育成する資質・能力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学附属小学校『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 服部太	4. 巻 48
2. 論文標題 多様性の構築過程に焦点を当てた社会科授業づくり 第6学年社会科「琉球・沖縄の学習」を事例にして -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学附属小学校『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島津礼子 七木田敦	4. 巻 42
2. 論文標題 大正、昭和初期における先住民アイヌの子育てと保育 ジョン・パチラー、パチラー八重子による平取幼稚園と日曜学校を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50042	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島津礼子	4. 巻 67
2. 論文標題 北海道における「アイヌ文化学習」の可能性と課題：ESDの観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/46809	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島津礼子・君岡智央・掛志穂・大場由美子・七木田敦	4. 巻 41
2. 論文標題 絵本でふれるアイヌ文化：子どもと保育者の感想の分析から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幼年教育研究年報	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/48216	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 島津礼子	4. 巻 66
2. 論文標題 先住民アイヌの知識, 自然観と持続可能性 : アイヌの口承文芸に焦点を当てて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 教育人間科学関連領域	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/44808	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 幼児期における他者理解：保育の中でアイヌにふれる意義とは
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 服部太 川村悠太
2. 発表標題 資質・能力を育成する社会科カリキュラムの開発 - グローバル社会の形成者として必要な資質・能力を育成するために -
3. 学会等名 日本カリキュラム学会 第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 北海道の公立小・中学校におけるアイヌに関する学習の現状 - 社会科副読本の調査から -
3. 学会等名 日本ESD学会 第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Reiko Shimazu, Yumiko Oba, Atsushi Nanakida
2. 発表標題 Ainu Culture in Picture Books
3. 学会等名 OMEP Asia Regional Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津礼子 七木田敦
2. 発表標題 大正から昭和初期におけるアイヌの子どもたちの保育：パチラー八重子の子どもたちへのまなざし
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 ニュージーランドにおけるマオリ語教育の展開と課題
3. 学会等名 中国四国教育学会 第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部太
2. 発表標題 多様化する社会に生きるわたしたち
3. 学会等名 第68回初等教育全国協議会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 アイヌの口承文芸に見られる持続可能性
3. 学会等名 日本ESD学会第1回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 北海道における「アイヌ文化学習」の現状
3. 学会等名 中国四国教育学会第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 保育におけるアイヌ絵本の可能性
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 先住民アイヌの知識、自然観に見られるESDの視点：アイヌのことばを手がかりに
3. 学会等名 日本ESD学会中国地方大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部太
2. 発表標題 わたしたちの生活と環境
3. 学会等名 広島大学附属小学校第98回研究発表協議会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部太
2. 発表標題 社会科で育成する資質・能力
3. 学会等名 広島大学附属小学校第98回研究発表協議会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津礼子
2. 発表標題 学校教育におけるアイヌ民族学習の展望と課題
3. 学会等名 日本ESD学会第4回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	七木田 敦 (Nanakida Atsushi) (60252821)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------